

平成二十八年三月一日発行 第二十六卷第三号 通巻第一九七号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐 かい

平成28年3月号


岡井省二創刊



福の神

高橋将夫

初市の一 番奥に福の神

雪達廉  平和主義者でありにけり

お元日ナビで浄土を探しけり

万象に影の生まるる初明り

『俳句界』一月号「選者競詠」より八句



初手水手にぬくもりの湧いてきし
初日の出よくぞ生まれたこの星に
狐火を探す天体望遠鏡
空欄を埋めるがごとき二日かな
鏡餅自重に耐へてをりにけり
風向きが変はり今年の風となる
初山河未来は今の中にあり



槐安集

水野恒彦

凍蝶やいまだ未知なる穹の果て
白臯かつ炯眼の虚子思ふ
巨頭鯨ごんどうくじらにひとすじの日矢のあり
狐火や硯海が波立つて来し
雪めがね閑けさはみな嶺にあり

加藤みき

息つめて独楽の止まるを見てをりぬ
女正月漢正月もありぬべし
ざざ虫もくぎ煮も舌にひとしなみ
紋服はたれにも似合ふ去年今年
大年の般若湯なり先祖



中島陽華

大仰な家訓笑うて新蕎麦よ
栗爆ぜる音そのままに火炎土器
窓と云ふ窓干し柿に日向道ひむか
忘れじの山のどうだん紅葉かな
しあはせの朱欒じやぼんと大徳に

竹内悦子

大年の雨の六波羅密寺かな
朝まだき湯舟や冬の大三角
木の葉降り止まず塵取と竹箒
大根や菊菜や蕪や紙袋
狐火や硯に水を垂らしをる

雨村敏子

よく晴れて音のなかりき竜の玉
太秦に牛の顔あり冬温し
端溪のつやや師走の墨を磨る
死去といはず他界と聞きし寒牡丹
狐火や万の神も鬼太郎も

近藤喜子

枯蓮の折れて真つ逆さまの空
雪をんな山の裏側知り尽す
寒潮や過ぎゆく風の白き音
狐火や穴に何かを埋めし跡
光りつつ夜の更けてゆく霜の花

本多俊子

山茶花の散り金星は光増す
月つきよみのみこと読命 鯨の海ひかる
冬北斗見上げてわれのあぎとかな
少年に宝の小石冬木の芽
水仙の匂ひの奥に母のゐて

瀬川公馨

源氏絵を昇華させたる冬辺かな
桐の葉にマント一枚注文す
猫殿が一足先に土龍打
ぎつくり腰や徒然のひとの芋粥よ
後家さんの虚言消ゆる煤拂

久保東海司

三寒の鴉四温に雀来て
履歴など無用の齡新豆腐
鳶の乗る上昇気流稲を刈る
仰向いて笑ふに似たる河豚の腹
芒野の半分が程枯極む

柳川 晋

祖靈悼水木しげるへとちやんちやんこへと仲間入り
省線悼野坂昭如を冬の螢が追うてゆく
ダイヤモンドダスト地水火風空
乳酸醗酵冬菜の浄土かな
枯野にて夢の欠片を拾ひける

熊川暁子

老いてこそ多彩に生きよ石路の花
親の枷とどかぬ辺り鳩浮かぶ
暖簾より肩の出て来る織田作忌
枯れ山や枯れば何かよみがへり
歳晩の有漏路うろちや鐘の東大寺

寺田すず江

白鳥来湖にはなやぎ戻りけり
真相はいつも意外や狐塚
インパネス遠ざかりゆく冬の虹
木菟やつまんでみたき耳ふたつ
先陣を離れし鴨の自在かな

岩下芳子

がやがやと大正月の来たりけり
文旦を挽いでしまへば枝軽し
猿廻しの猿のすねたる神の庭
擦くすくれば冬將軍の負けにけり
初山河大氣の満つるところかな

近藤紀子

櫛紅葉白犬いよよ白きかな
わだかまりを置いて帰りしクリスマス
サヌカイトの音冬の樹の間をぬうて
気まづさの音となりたる虎落笛
神こ山やまを嘯なげとしたる寒鴉

岩月優美子

ポインセチア心に余熱ありにけり
振り絞る命に添ひし冬林檎
宙に舞ひ風に任せる波の花
蒼天を降り白鳥の白極む
もろもろの傷跡残し年流る

竹中一花

子を負うて紅を差しをり去年今年
動かざる白ふくらふに水の照り
裸木の衣になりけるLED
歩を合はし冬三角の星の下
虎落笛夜は子供の泣き声に

槐市集

時 澤 藍

この池の主でござると寒の鯉
初氷しばらく過去は封じをり
先人の知恵にあやかると冬至かな
一日を使ひきつたる冬至かな
日向ぼこ優しく溶けるウエハース

中 貞 子

手袋や事の始めの第一歩
大銀杏明智鉄道の力瘤なり堂守る
小春日明智鉄道のローカル列車極楽へ
冬紅葉茶室の屋根の苔むして
富士山を遠景にして懐手

中 島 昌 子

撫牛の背中斜めに冬日射す
敷松葉下に何やら動くもの
老犬と分かち合ふたり冬日向
極月や星占ひの指の先
丹田に響くゴスペルクリスマス

中 田 禎 子

冬うららレンガ倉庫にカレーパン
冬晴れの庭留袖の立姿
身とこころ軽くなりたり冬の雨
冬星の残る道なり寺参り
冬かもめゴム長二足干してある



中谷富子

かぶらずし母の味には追ひつけず
日向ぼこ親子だるまの笑ひ声
指折りて待つ正月や子沢山
じやれてくる犬の布団を干しにけり
冬蜂を殺しはらからふと思ふ

中堀倫子

つれもつてふぐり落しや京の里
ラガーマン一投足に客の声
さつきゆうの仕事を終へし冬の午後
ひねもすのどこかでゆるむ冬の夜
村村の冬の菜畑つづらをりり

橋本順子

ま二つに冬至南瓜日の色す
枯蓮の水に夜明けの来てをりぬ
水涵れてまさらな白砂川底に
花八つ手八雲の家の古ガラス
寒星や豊漁の旗ひるがへる

前田美恵子

冬毛立つ猿の眼の爛爛と
年の暮白紙撤回ままならず
落葉積む歴史の重み垣間見へ
尻撫でて冬至南瓜選びをる
裸木のまとへるものは風衣

安野眞澄

木枯しも連れ帰り来し頭陀袋
才能は人それぞれに冬木の芽
幾歳月校庭彩る大銀杏
人の世も裏表あり白障子
息災を祈る産土石路明

柳橋繁子

金銅の銚金具や煤払ひ
電飾の町の片隅おでん酒
大雪や人肌こひし般若湯
隣訪ふ両手に大根ぶらさげて
数へ日のことはりがたき置き薬

槐集

高橋将夫選

初鏡俳句はこころ写すなり
枚方 中谷 富子

蓑虫の驚いてゐて同じ顔

年迫る上から目線のゴリラかな

初鴉何かかくしてゐさうなり

冬眠の寝返りをうつ穴まどひ

初山河ノアの夢見し大地かな
大阪 有松 洋子

白鳥の夕日に透けて玻璃となる

聖夜更く人の祈りの地に満ちて

膝の傷へ冬日泌みこむ心にも

我は狼人に頭は撫でさせぬ

冬ざれや明日につながる残る月
江島 照美

名人は目立たぬ人よ紙を漉く

花柎刺ある君の美しさ

銀杏散り心静かに黄に染まる

大根を胸に抱へて歌碑めぐり

風波に命吹きこみ波の花
岡崎 柴田 靖子

凍滝や轟音とじこめ睡りをり

変る体の儘ならず冬桜

こんな夜は炭火に明日の夢思ひ

鴨の陣夕日をかへし賑にぎし

奥の間に冬至南瓜と骨箱と
摂津 中田 禎子

がらくたに冬の日返す物のあり

鍵束を他人にまかせ大根焚

こぼれたる掌中の珠うつ田姫

梟や眠りの森に誘はるる

雲にのる夢を見るため布団干す
枚方 中島 昌子

工廠の跡のキャンパスラグビー部

枯葦や川の名ここより変はりたる

膳にのる根菜多し冬に入る

煮凝りの深海の色ふるへをる

銀河往来 高橋将夫

◇『槐集』観賞

初鏡俳句はこころ写すなり 中谷 富子

鏡は姿を映し、俳句は心を写すという。俳句は精神の風景なのだ。季語の「初鏡」と切れ字の「なり」がよく効いている。〈蓑虫の驚いてゐて同じ顔〉の句の「蓑虫の驚いた顔」、〈年迫る上から目線のゴリラかな〉の「ゴリラの目線」、〈初鴉何かかくしてゐさうなり〉の「初鴉の隠し事」、〈冬眠の寝返りをうつ穴まどひ〉の「冬眠の蛇の寝返り」はそれぞれもの、この核心を突いている。肩に力を入れることなく、サラリと詠まれていて好感がもてた。

初山河ノアの夢見し大地かな 有松 洋子

元朝の美しい大自然。方舟で大洪水を逃れるノアが夢みたのはそんな大地だったのだろう。〈聖夜更く人の祈りの地に満ちて〉の句、「祈りが地に満ちる」の表現に打たれた。幸せ、健康、平和などさまざまな祈りが込められている。

一転して、〈我は狼人に頭は無でさせぬ〉の句。狼は犬のように頭を人に撫でさせない。作者の内面を垣間見た思いがする。

名人は目立たぬ人よ紙を漉く 江島 照美

一口に名人といってもいろいろだが、本当の名人はしやしやり出ない。名人には技だけでなく、人格まで備わっているのだ。

能ある鷹は爪を隠すという。

〈銀杏散り心静かに黄に染まる〉の句、銀杏が散る中で心まで黄に染まっている。いかにも作者らしい精神の風景。

風波に命吹きこみ波の花 柴田 靖子

風が波に命を吹き込み、波の花が散るといふ。素晴らしい感性だと思ふ。

〈こんな夜は炭火に明日の夢思ひ〉の句からは作者の穏やかな心情が伝わってくる。

鍵束を他人にまかせ大根焚 中田 禎子

鍵束を他人に任せる。油断ではなく、信頼なのだ。なにしろ大根焚で親鸞上人に見られているから、任せられた方もうかつなことはできないのだ。

〈がらくたに冬の日返す物のあり〉の句、着眼が見事。

雲に乗る夢を見るため布団干す 中島 昌子

理屈の句ではない。感性の句である。干されてふわふわになった布団の感触を誰もが思い浮かべるだろう。

〈工廠の跡のキャンパスラグビー部〉はシニカルで面白い。〈煮凝りの深海の色ふるへをる〉の句、なるほどと思ふ。

不安ふとおのれ鎮める懐手 吉田 順子

懐手には、寒いからだけでなく、思索する場合などいろいろなシチュエーションがあるが、掲句は不安を鎮める場面での懐手。不安まで句材にしてしまうあたり、さすがと思ふ。

〈以下略〉